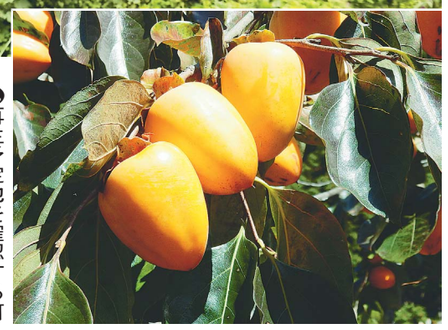
地方総合

各地の話題

江戸時代からの希少柿守る

祇園坊柿　生産組織を法人化

広島・安芸太田町 あきおおた元気村



上再生予定地を確認する河本昭文組合長（左）と河本穂津雄事務局長、右祇園坊柿

【広島】安芸太田町特産の祇園坊柿（ぎおんぼうがき）は、広島原産の古品種。江戸時代から植えられている希少な柿の木で、ほとんどが同町で栽培されている。

祇園坊柿は、他の品種と比べると一回り大きく、500㌘ほどある種なしの渋柿で、肉質が緻密なのが特徴。まろやかで上品な甘さを楽しめることから「柿の王様」と称される。渋抜きしたあおし（あわせ）柿か干し柿に加工し販売している。

古くから暮らしと共に大切に受け継がれていたが、生産者の高齢化や担い手不足、園地の荒廃や生産量の減少など経営環境は悪化していた。そのため、「（農）あきおおた元気村」（河本昭文組合長、組合員43人）を設立し、祇園坊柿の継承、生産の拡大、経営の合理化、販売のブランド化などに取り組んでいる。

本年度は生産量の確保を進めるため、約1㌶の耕作放棄地を再生。苗木300本を植栽し、樹園地化をめざしている。

学食で食品循環を実現

残渣を水耕栽培に活用

大阪・茨木市 藍野大学

水耕施設でサラダ菜などを栽培

【大阪】茨木市の藍野大学では、学生食堂の食材として、水耕施設でサラダ菜などを月に96株生産している。

2022年以降の取り組みで、受講者数から食事準備量を想定し、定食のご飯量を小盛、普通、大盛とすることで食べ残しを減らすなど、学内の食品ロスを削減している。それでも発生する食品残渣（ざんさ）をごみ処理機で分解し、発生する有機物を栽培施設で利用している。

一方で、校舎は災害時に地域住民の一時避難場所とし、避難者約500人の受け入れが可能だが、災害時に学内で提供する備蓄食品は炭水化物が主で、ビタミンやミネラルなどが不足する。そこで、平時は学生食堂などに、災害時は避難者に提供することで不足する栄養を補うとともに、日々作物が成長する様子を避難者の癒やしとするため、月産400株の大型施設の導入を検討中だ。

大型施設は高額なため、目標額を357万円に設定したクラウドファンディングを活用した資金確保をめざしている。募集期間は11月20日まで。詳細は、二次元コード参照。

「農業に夢を感じて」

中学時代からの思い実現し就農

兵庫・稲美町 竹元さん

育苗ハウスで農業への夢を語る竹元さん

【兵庫】稲美町の竹元（たけもと）裕晴（ゆうせい）さん（20）は、農業に夢を感じて県立農業高校に進学。高校時代から野菜づくりをスタートさせ、卒業後すぐに就農した。稲美町特産のスイートコーンやキャベツを中心に栽培し、就農3年目で2㌶まで規模を拡大している。

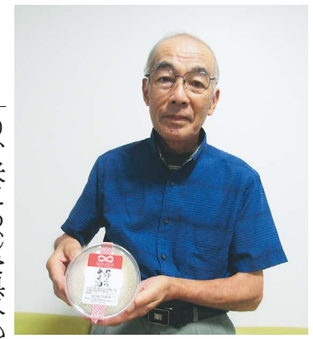
サラリーマン家庭に育った竹元さんの実家には60㌃の農地があったが、すべて貸し出していた。そんな竹元さんが農業に目覚めたのは中学時代。父の知人の野菜農家が、キャベツ栽培で大きな収益を上げていることを知ったからだ。

いきなりの独立就農も「若いからこそ挑戦できた」と語る竹元さん。法人化への夢も視野に入ってきた。180㌢を超える長身と日に焼けた笑顔は、まるで農業に向き合う〝若きメジャーリーガー〟の風格を感じた。

甘酒の力で健康回復

健康づくり・地域振興へ製造・販売

大分・由布市 縣 次男さん



自家製甘酒を手に縣さん

【大分】由布市湯布院町塚原で農業を営み、同市農業委員を務めている縣（あがた）次男さん（77）は、こだわりの甘酒を製造・販売し、甘酒の良さを発信している。

きっかけは数年前に重病を患った際、医師から甘酒を毎日摂取することを勧められ、病状が驚くほど改善したことだ。甘酒は栄養豊富で滋養強壮の効果があり、「飲む点滴」ともいわれている。

縣さんは以前から自家製の甘酒を販売しており、米こうじを県外から取り寄せるなど、独自の製法にこだわりを持ち続けている。「自分で造った甘酒で健康になれることは幸せなこと。皆さんにもお勧めしたい」と語る。

縣さんは甘酒だけでなく、難関のどぶろく製造免許も取得し、意欲的に新たな挑戦を続けている。健康づくりと地域振興をめざして、これからも励んでいく意向だ。

福岡・香春町 かわら夢ファーム

農地集積で期待の法人

農業委員会も積極的に協力

梅林代表（右端）とかわら夢ファームの皆さん

【福岡】香春町農業委員会（加治秀幸会長）は、農業委員13人と農地利用最適化推進委員3人の体制で、担い手への農地の利用集積・集約化に取り組んでいる。

同町中組地区の㈱かわら夢ファーム（梅林募代表）は、地域で協業を図り、生産性の向上、安定した農業経営を目的に2020年1月に設立。地域計画のモデル地区である同地区の中心経営体として期待されている。

同法人への農地集積には、地域の農業委員と推進委員が協力。現在農地17㌶に水稲、飼料用米、麦を作付けている。本年度はさらなる規模拡大や作業の効率化、生産性の向上をめざし、県水田農業DX推進事業を活用してコンバインを導入した。

加治会長は「地域の意向を踏まえ、町や関係機関と連携しながら、将来にわたって農地を守り、引き継いでいきたい」と思いを語る。

新品種・新技術などPR

鳥取県農業試験場がセミナー

【鳥取】鳥取市橋本の県農業試験場（高木瑞記麿場長）は8月23日、同場会議室と試験圃場前で公開セミナーを開催。県稲作経営者会議や農業法人協会の会員など、農業者約100人が来場した。

高木場長が「コロナ禍後、昨年から復活し今年も無事に開催できた。現場に即した技術開発の上で、担い手の皆さまと意見交換できる貴重な機会であり、来場に感謝している」とあいさつした。

続いて、中村広樹作物研究室長が県内で開発された稲の主食用品種「星空舞」、カレー用品種「プリンセスかおり」、酒米「五百万星」の特性と栽培の留意点、奥谷恭代環境室長が問題害虫イネカメムシの発生状況と従来とは異なる防除時期への配慮、三谷誠次郎水田高度利用室長から「県みどりの食料システム戦略基本計画」に沿った水稲やネギ、オクラなどの有機・特別栽培技術の開発状況をそれぞれ紹介＝写真。参加者からは熱心な質問が多くあがった。

圃場移動後の意見交換では、県西部からの参加者が「米不足に伴う米価回復が見込まれる。経営安定に向けて的確な技術を取り入れるには、今後も試験場の技術公開は欠かせない機会」と話した。

農地利用最適化へ情報共有

愛知県農業会議が農業委員等研修会

主催者としてあいさつする県農業会議の川上会長

【愛知】県農業会議（川上万一郎会長）は9月6～12日、県内3会場で「農業委員・農地利用最適化推進委員等研修会」を開き、延べ約1千人が参加した。

研修会は、農地利用の最適化活動を推進するため、農政施策の最新情報の周知と地域計画の策定など各地で取り組まれている現場活動を委員に周知し、今後の活動に活かすことが目的。

研修では、東海農政局から「食料・農業・農村基本法の改正内容と関連施策」、全国農業会議所から「農業・農政を巡る情勢と農業委員会組織の活動」、県農業会議から「本県における農地利用最適化の取り組み」、県農業振興課と県農業振興基金（農地中間管理機構）から「地域計画公告後の農地の貸借など」が説明された。

参加者からは、国庫帰属制度、所在者不明農地の取り扱い、営農型太陽光発電の下部農地の営農についてなどの質問があがった。

人手不足時代の経営発展めざす

香川県農業経営者協議会が研修会

【香川】県農業経営者協議会（六車孝雄会長）は10月7日、高松市内で「人材確保・育成に関する研修会」を開き、会員や賛助会員など20人が出席した＝写真。

研修会では、社会保険労務士の諏訪学氏が「人手不足時代の経営発展を考える」と題して講演。有効求人倍率など県内労働市場の状況を踏まえ、既存従業員のシフト見直しや作業請け負いなど雇用以外の手段の模索、今後の経営の見直しなどを促し、募集方法別の特徴、育成・定着の問題点、スマート農業、経営発展手法などを事例を交えて紹介した。

「産地の繁忙期に特化した人材派遣をしている会社などもある」といった具体的な取り組みが紹介され、出席者からは、中途採用のための求人媒体に関する質疑があがるなど、現場が抱える課題について意見交換した。

同協議会では、今後、異業種経営から学ぶ研修などを計画している。